



## 『関西企業ヒストリア』 ～その強さの秘密・転換点を探る～

創業から70年以上の歴史を重ねる会員企業を取り上げ、時代の荒波を乗り越えて、長い期間にわたって生き残り成長してきた強さの秘密、その歴史の転換点を探ります。

### 第5回 創業 1916年（大正5年）

## きた産業 株式会社

### コルク商「喜多鐵之助商店」創業 ヨーロッパ視察で見識を深める

**1916年** ▶ きた産業株式会社は1916年、大阪市北区若松町（現・大阪市北区西天満付近）にてコルク商「喜多鐵之助商店」として創業しました。

創業者の喜多鐵之助は、1893年、滋賀県近江八幡市で酒造業を営んでいた家の三男として生まれました。鐵之助が誕生した時には喜多家の家業はすでに逼迫していましたが、鐵之助は立派に成長し、大阪・道修町のコルク商「岩崎商店」に奉公に出ました。

1916年、24歳の時に独立を果たした鐵之助は、富永商店（後の富永銅業株、合併により現・大同特殊鋼株）の富永機輔氏や、壽屋（現・サントリーホールディングス株）の鳥井信治郎氏の賛同や後援を得て、1919年、28歳の時に単身ヨーロッパへ向かい、スペイン、ポルトガル、フランスなど、約1年間の視察を行いました。英語は独学のほか、関西学院大学の夜学に通って習得しました。これらの経験が、後のコルク加工や生葡萄酒の自社輸入の礎となりました。



喜多鐵之助

生葡萄酒はポルトガルから輸入したものを壽屋のほか、大黒葡萄酒（現・メルシャン株）、ハチブドー酒で有名な合同酒精（現・オエノンホールディングス株）に販売しました。当時はワインに甘味をつけた赤玉ポートワインのような甘味果実酒が主流で、鐵之助の輸入した生葡萄酒は主にその原料に使われました。

### 世界各地に出張所を開設

**1925年** ▶ 1920年代になると喜多鐵之助商店は海外へ大きく飛躍する時代へ突入しました。1925年には当時まだフランス領であったアルジェリアの首都アルジェに出張所を開設し、コルクの買い付けを開始しました。その翌年、台湾に台北出張所を開設、酒類を独占販売していた台湾総督府専売局の指定業者として酒類向けコルク栓の販売を行っていました。1929年にはアルジェ出張所をよりコルクの集散するポルトガルのリスボンに移し、新たにリスボン支店として開設しました。

日本では、1932年に東京市荒川区（現・東京都荒川区）でコルク製品製造工場を設立。1933年には「合名会社喜多商店」に、1938年には「株式会社喜多商店」へと改組を重ねました。

この当時の事業は、輸入したコルクでコルク栓や王冠の製造を行うほか、樽詰めワインの輸入、貝ボタン、漁網、緑茶の輸出なども手掛けました。



創業5周年の記念写真(1921年)  
前列中央、白い背広と白い靴の人物が鐵之助

## 知恵をしばって乗り越えた戦争

**1940年**▶ 第二次世界大戦が開戦すると、1940年にリスボン支店が、続いて1942年に台北出張所が閉鎖を余儀なくされました。1943年には、社員の徴用を防ぐため千葉県船橋市に木造船を製造する「千葉第一造船所」を設立しましたが、事業としては決して成功とは言えませんでした。

同年、喜多商店は「喜多産業株式会社」へと改組。戦争中は王冠、コルクの製造は統制となり、兵隊用の金属食器のプレス加工なども行っていました。この頃、輸入が途絶えたコルクの代わりに、広島や岡山の中国地方に自生する「あべまき」の樹皮を使用していました。



コルクの加工の様子

戦争が終わると、酒造組合中央会の指定により、大蔵省からブリキ、コルクの割当を得て王冠を製造することで再始動を果たしました。その後、事業は順調に回復。1960年代になると、清酒の需要増加に伴い喜多産業の業績も拡大、奈良県に3か所の工場を開設し、増産体制を整えました。

しかし、プラスチックという新素材の出現により、状況は次第に変化していきます。第二次世界大戦の終結以降、鉄や銅、アルミといった金属が軍事利用において貴重になったため、市場ではその代替としてプラスチックの需要が急速に高まっていました。日本でも安く使い捨てができる便利さが受け、様々なものがプラスチックに取って代わりました。



ここが  
転換点

**コルクを離れ  
新分野・新事業に挑戦**

**1965年**▶ プラスチックの出現は、当然、コルクにも影響を及ぼしました。替栓は次第にポリエチレン製へと変わっていき、1965年頃からコルクジスクの製造を停止、

1975年頃にはコルクの輸入自体をストップしました。

時代に翻弄される一方で、二代目社長の喜多義夫は新分野・新事業に積極的に取り組みました。クロージャ（容器のふた類の総称）関係では、1960年に冠頭を商品化、翌年に一升びん用王冠の「デラックス王冠（冠頭）」の特許を出願しました。当時の同社の成長を支えた原動力のひとつは、このデラックス王冠でした。

この頃、いくつかの会社から競って似た特許が出願されましたが、義夫は王冠組合で組合員すべてがデラックス王冠の特許を利用して製造できるようにしました。このことにより、清酒・焼酎業界にデラックス王冠が定着しました。その後も1972年にワイドキャップ、1977年にPPキャップ（Pilfer Proof Cap：改ざん防止キャップ）の製造を開始しました。



左上：デラックス王冠  
右上：ワイドキャップ  
左下：PPキャップ

## 加熱機能付き容器の生産量で世界一

**1979年**▶ 1979年から、金属缶に替わる紙缶（コンポジット缶）の製造を奈良工場で開始しました。1985年には、富久娘酒造がお燗機能付き清酒「燗番娘」を発売しました。この缶は断熱のためコンポジット缶を採用しており、喜多産業はサプライヤーの1社として加熱機能付き容器と関わり始めました。その後改良を重ね、安全性の観点から、コンポジット缶から金属缶に切り替えて、2011年まで「加熱機能付き容器」の生産を行いました。生産累計は6,000万缶以上にまで上り、これは恐らくいまだ破られない加熱機能付き容器の生産量世界一の記録です。



## 清酒からクラフトビール、 そしてワインへ

**1994年**▶ 1994年、酒税法の改正により、ビールの製造免許を取るのに必要な最低製造量が、それまでの年間2,000klから清酒と同じ60klにまで引き下げられました。これにより、大手メーカーにしか許されていなかったビール製造が、各地の中小メーカーにも可能になり、日本全国で「地ビール」が誕生することになりました。1991年に三代目社長となった喜多常夫（現社長）は機械部門を新設、充填設備や資材販売で地ビールに参入し、それまで清酒・焼酎中心だった得意先が大きく変わりました。

2000年頃からは地ビールだけでなく、ワインのパッケージ資材や醸造設備の輸入・販売にも取り組み始めました。1999年のミラノで開催されたワイン機器・資材展示会に、ビール向け充填機で取引があったカリフォルニアの業者のオーナーに同行してもらったことがきっかけで、イタリアやフランスの有力企業と直接取引ができるようになりました。当時はちょうど日本ワインの成長期でもあり、ワイン関連は地ビールに並ぶ販売分野にまで成長しました。現在では大手から中堅・中小まで、多くのワイナリーと幅広い取引をしています。



アイルランドのギネスビールの研究所に  
納入された自社製のビール缶詰機

## 30年ぶりにコルクの輸入を再開

**2005年**▶ プラスチックの波に押され1975年に一度コルクから離れた同社ですが、創業の原点であるコルクには常に関心がありました。ポルドーの展示会で目にした合成コルク「ノマコルク」に惹かれて取引を申し込み、2002年頃から日本での販売を開始しました。その後、ノマコルクは世界市場で急成長し、喜多産業にとって大きな力になりました。

戦前から戦後にかけてコルクの取引があったポルトガル

のアモリム社は、世界のワイン栓の3割、シャンパン栓の5割を供給する世界最大のコルクメーカーです。2005年、アモリム社のヨアキム・アモリム氏が来訪したことをきっかけに、実に30年ぶりにコルク輸入を再開、天然コルクを含むワイン栓全般を扱うようになりました。



ノマコルク(左)と天然コルク(右)

## 歴史と信頼 次の100年に向けて

**2016年**▶ 2006年には社名をひらがなの「きた産業株式会社」に変更し、より親しみやすいイメージを目指しました。この頃から「増客」戦略を推進し、現在は清酒、焼酎、ビール、ワイン、ウイスキーなど、日本全国の酒造メーカーの過半数にあたる1,400社との取引があります。

2016年に同社は創業100周年を迎えました。清酒や焼酎の王冠に関しては、戦前から戦後にかけて取引が始まった200以上ものブランドと、半世紀を越えて現在も継続的に取引をしています。創業以来変わらない「常に挑戦する」社風を維持しながら、100年の事業活動で培った知見と技術を活かし、きた産業はこれからもより価値高い企業を目指していきます。



### きた産業 株式会社

本社所在地：大阪市生野区桃谷 1-3-9

従業員数：約120名 資本金：1億4,000万円

事業内容：キャップ、ペットボトル、加熱機能つき容器などの製造・販売、  
ガラスびん、ラベル、アルミ缶などのデザイン・商品企画